

たまねぎ春まき作型におけるアザミウマ被害と有効薬剤

【1 成果概要】

- たまねぎ春まき作型では6~7月の球肥大期に気温が高めに推移するため、ネギアザミウマによる被害が懸念されています。そこで、ネギアザミウマによる被害実態や有効薬剤について検討しました。
- たまねぎでは出荷部位への直接の加害はありませんが、葉身への激しい被害を生じ(図1)、球肥大が抑制されて収量が2割~4割低下します(表1)。このため、本種の防除は必須です。
- ネギアザミウマ(本種)の防除には、プロチオホス乳剤(商品名 トクチオン乳剤)の効果が最も高く、同剤を主体とした薬剤散布を実施します。



殺虫剤なし



殺虫剤散布(計6回)

図1. ネギアザミウマによる被害風景(2015年8月3日撮影)

表1. 殺虫剤散布の有無と調製重、腐敗、商品収量との関係(2014-2015年)

年次	殺虫剤散布の有無	たまねぎの球の大きさ			出荷規格割合(%)					腐敗球率(%)		商品収量※ (t/10a)
		横径 (mm)	高さ (mm)	調製重 (g/個)	2L	L	M	S	外	全体	(うち、内部腐敗症状)	
2014年	散布(6回)	84.1	70.3	269.5	21	50	26	3	0	1.9	(0.0)	5.84 (100)
	なし	78.7	66.8	223.5	5	38	49	8	1	6.3	(0.6)	4.60 (79)
2015年	散布(6回)	79.0	66.5	221.5	2	43	50	5	0	0.0	(0.0)	4.92 (100)
	なし	68.6	58.7	148.6	0	5	35	51	8	14.6	(10.4)	2.75 (56)

※規格外、腐敗球を除いたもの

【2 留意事項】

- (1) 本種に対する殺虫剤散布を6月から7月にかけて計6回実施していますが、防除時期や防除体系については検討中です。
- (2) 本種はたまねぎ中心葉に多く生息するため、中心3葉を重点的に観察します。
- (3) 本種の防除により腐敗球が減少する傾向がありますが、詳しくは継続検討します。
- (4) 農薬を適切に使用いただくため、「平成27年度試験研究成果」もあわせてご覧ください。

【3 適応対象】

- (1) 地帯 県中北部
- (2) 対象者 営農指導者(農業普及員等)